

明石実夕先生による 12星座占い

筑後地方限定

2月

明石 実夕 (あかし みゆ)
開運風水学・紫微斗数占い(運命学)・
易学を中心に鑑定と教室を行っています。
<https://akashimiyu8.com>
問:090-7294-0527



牡羊座

焦ることがあっても、解決し物事が進み始めるでしょう。ステップアップし自己成長できるとき。



牡牛座

真面目に取り組んだことは裏切らない。変化を恐れずに自分を信じて前進しましょう。負けないで!



双子座

希望が叶うとき。自分の思う道を突き進みましょう。迷わずチャンスをつかむ行動を。



蟹座

自分磨きに集中してみて。デトックスするのがおすすめ。理想の自分に近づけそう。忘れ物に注意。



獅子座

周りの人との絆を深められるとき。旅行の計画を立ててみて。強引になりがちな点は注意しましょう。



乙女座

努力次第で知的才能を発揮できそう。気配りで好感度アップ。ストレスからの暴飲暴食に気をつけて。



天秤座

自分を信じて突き進もう。幸運をもたらす人脈に恵まれるとき。救いやチャンスに期待あり。



蠍座

友人や家族を大切に吉。感情的にならないように気をつけて。恋のチャンス。恋愛を楽しもう。



射手座

運気が見方するとき。良い情報に恵まれそう。スキルが仕事に活かせて、やりがいを感じるでしょう。



山羊座

安定した運気。でもマイペースすぎない行動を。収支の管理が必要。お金の大切さを実感できそう。



水瓶座

全てが順調なとき。表舞台に立てる絶好のチャンス。努力を重ねれば物事を達成できるでしょう。



魚座

潜在意識を活かすことで幸運をつかめそう。収入源の確保。モチ期到来。体調だけは気をつけて。

ちくこのいいものをギュッとコンパクトに詰め込んだ情報紙

SECOND

2023
vol.122
FREE

02

情報紙 セカンド

発行人 / 石橋雅子

〒830-0003 久留米市東櫛原町2066

TEL.090-5749-9964

MAIL info@new-second.com

<https://www.new-second.com>

<http://www.facebook.com/new.second.kurume>

[second_freepaper](#)



15

店舗

ようこそ
久留米の
まちなか飲食店へ



ラーメン外伝 114

幻の脚本③ 香月 均史

今回の映画「ラーメン侍」幻の脚本シリーズは、色々の事情で撮影を断念したシーンを紹介したい。まさに読者しか知り得ない幻の脚本の中の幻のシーン、お楽しみいただければ幸いです。

＊(光)『そのとき父ちゃんの顔は阿形(あき)よう像にシフトしました』昇はつぶやいた「俺、きょう誰かデヤした(殴った)か?」

4 仕入れ修行
前略、
電車の中。仕入れ帰りの昇ときなこが並んで座っている。頭上の網棚には仕入れたばかりの豚肉と豚骨の紙包みがある。

阿形の顔のまま前を見るといより呪む(む)と、正面の新聞を抜けて顔を隠した老紳士の指が、小刻みに震えている。船を漕いでいるきなこの横には若い女性が生かす。この女性には、顔が阿形から阿形へとメタモルフォーゼするモノノケのようなオヤジと、生け贄(にえ)にさのようなきなこ、そして網棚(のみの)の血の包みを見ながら恐怖で青ざめ、さらに前の老紳士の抜けた新聞の見出しを見て凍りついた。そこには大見出しで「バラバラ殺人」小見出しで「列車で運ぶ」とあった。その瞬間、飛び血を浴びながら船を漕いでいたきなこが、熟睡のあまり、その女性に倒れ込んでいた。

「いいきなこ。久留米が品薄のときは、こげんして熊本まで仕入れに行くたい。俺が行けんときは、お前がこの要領で豚肉と豚骨は仕入れて来い」

女性悲鳴を上げながら隣の車両に逃げ去って行った。昇は阿形のまま、まだ前の老紳士を睨んでいる。

昇は身振り手振りを加えながら伝えた。きなこはうつむいたままうなずいた。あとは無言の二人。静かに揺られている。車両の客は彼ら以外に七、八人ほど。車窓から吹き込む風が心地よいせいだ。昇は腕を組んだまま居眠りをはじめた。きなこも続いて船を漕ぎはじめた。

＊(光)『父ちゃんは、寝ても卍形(うんぎよう)像の顔でした』

すると突然、昇の肩や頭に、赤い血のようなものが数滴落ち始めた。それは頭上の紙包みからたれ落ちているようだ。昇は気づかず腕を組んだまま卍形顔で寝ている。

老紳士は、新聞を抜けて座った格好のまま、カニのように横に移動しながら逃げ去った。やがて誰もいなくなった車両に二人はぼつりと座っていた。

きなこも船を漕ぎ続けている。やがて紙包みの赤い染みが広がりはじめた。包みの中の冷凍の豚骨が、夏の陽気で解凍され、それが豚肉の肉汁と共に流れ出したのだ。その流量は段と増し、昇の上半身を血まみれにしている。さすが昇もそこで目が覚め、赤く染まった自分の腕や肩を見てきょうとし、目を見開いた。

昇がつぶやいた。「きなこ、こん次は、ナイロン袋ば忘れるな」